

小学校国語科における「読むこと」の学習指導研究

—「二律背反」する教育観を超えて—

所属校：品川区立第一日野小学校

氏名：寺岡 聡志

派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：二律背反する教育観・一元化・教師の手立て・ゆさぶり発問・教材提示の工夫

I 研究の目的

本研究は、「系統主義と総合主義」「能力主義と経験主義」「教師主導と児童中心」という「二律背反」する教育観を超えた学習指導を究明することを目的としている。このような目的に至った理由は、以下の諸問題を実践者として究明したいという思いからである。

(1) 学習指導要領の改訂と研究者の危惧

学習指導要領の改訂に伴い、各教科の授業時数と学習内容が増加された。このような事実を受け、研究者や実践者の中には、「内容が困難になり過ぎると、どうしてもしっかりと教えたいと思うあまり、再び教師主導の授業が増えてくるようになる」と危惧する声がある。

一方、旧学習指導要領では、「内容の取扱い」であった「言語活動の例」が、新学習指導要領では「内容」そのものに組み入れた事実を受け、戦後の経験主義教育のように「這い回る経験主義」に陥りはしないかと危惧する声もある。

つまり学習指導要領の改訂を受け、「教師主導の詰め込み型の授業にならないか」「児童に迎合する『はいまわる経験主義』に陥りはしないか」という、相反する危惧の意見が上がっているのである。

(2) 二律背反する教育観の狭間で苦悩する教師

先述した状況を受け、ある実践者は「系統を重視すべきか、活動や経験を重視すべきか、子供が中心か、教師が主導すべきか。算数教育はその転換の度にどの教科よりも大きく揺れてきた」と言説している。学習指導要領等の制度に伴う転換期の度に、教育現場の教師達は「学習者中心型授業」と「教師主導型授業」、「活動や経験を重視する授業」と「系統や能力を重視した授業」という二項対立の狭間で、自身の指導の在り方について揺れ動いてきた。もちろんそれは算数科だけではなく、

師達の教育観や指導観が再び揺さぶられることは容易に想像がつく。

(3) 一元化を図る指導法が待たれる

二律背反する教育観のそれぞれに長短があることは多くの研究者が指摘するところである。そのため、二律背反する教育観を対立事項として捉えずに、統合し一元化することの意義を示唆する研究者も少なくない。しかしながら、『『教えること』と『学ぶこと』とを対立させないで一元化する方法を考えることが今後の課題となろう』と大内善一が述べるように、一元化を図るための具体的な方法論はまだ現出していない。それ故に、二律背反する教育観を一元化する具体的な指導方法を考案することが今後の課題なのである。

II 研究の方法

二律背反する教育観を一元化する指導方法を究明するため、以下の手順で研究を進めていく。

(1) 意義的アプローチ・・・二律背反するそれぞれの教育観の辞書上の意義を追究していく。

(2) 史的アプローチ①(制度面)・・・学習指導要領という制度面の変遷を考察し、二律背反する教育観の現出を、その時折の教育思潮と合わせて追究していく。

(3) 史的アプローチ②(研究史)・・・研究者たちの論考を考察し、二律背反するそれぞれの教育観が内包する今日的な課題を追究していく。

(4) 史的アプローチ③(教育史)・・・教育史を紐解き、二律背反する教育観の一元化を目指した実践者の指導方法を追究していく。

III 研究の成果

本研究の成果は以下の通りである。

(1) 意義的アプローチの成果

二律背反する教育観の意義を追究し、整理すると以下の様にまとめることができる。

二律背反するそれぞれの教育観や指導方法は、辞書上でも対立的に捉えられていることが分かる。しかしながら、どちらの主義主張も「能力」

を育成することを志していることに変わりはない。「重んじる言語観」「とられる指導方法」そして「教育観・指導観」の差異が、対立事項として捉えられているのである。

	育成するもの	重んじる言語観	指導方法	教育観・指導観
能力主義	体系的な知識や能力	体系的な言語観	系統的な指導	教師中心主義
経験主義	児童の言語生活に根ざした知識や能力	経験を通して得られる生活言語	機会（総合）的な指導	児童中心主義

(2) 史的アプローチ(制度面と研究史)の成果

学習指導要領という制度面の変遷を考察すると、対立する二律背反の教育観は、時代の風潮と相まって現出してくる。すなわち、「学力低下」が紛糾された教育思潮のもとでは、「系統で能力を重んじる教育観」に反映された学習指導要領が現れる。一方「心の豊かさや」「ゆとり」が求められた教育思潮のもとでは、系統的で能力を重んじる教育観は後退し、逆に「経験を重んじた総合的な学習指導」に反映された学習指導要領が現出してきたのである。このように、「系統主義と総合主義」「能力主義と経験主義」「教師主導と児童中心」は、「二律背反」の対立事項として捉えられてきたので、一方が求められれば、片一方が後退するような変遷を学習指導要領は繰り返してきたのである。

しかしながら、浜本純逸などの研究者が言説するように、現行の第八次学習指導要領は、対立する二律背反の教育観を一元化した、あるいは超えた指導要領と見なされている。つまり、様々な変遷を経て現行の学習指導要領は、二律背反する教育観を一元化した指導要領であると価値付けることが出来るのである。

先述した通り、一元化を図る具体的な指導方法はまだ現出してはいない。しかし研究者の論考を整理すると一元化を図るためには「子供の思いや興味関心、問題意識を喚起する教師のはたらきかけ」や「子供が主体化される言語活動や体験の設定」が重要な手がかりとなる。

(3) 史的アプローチ(実践史)の成果

先述した「一元化を実現するための手がかり」をもとに実践史を紐解くと、青木幹勇の実践に行き当たる。つまり、「教材提示の工夫」と「揺さ

ぶり発問」が、一元化を図る上で重要な手立てとなることを追究した。

「教材提示の工夫」と「ゆさぶり発問」は、子供たちに学習に対する必要感や切実を喚起し、問いや課題を誘発するはたらきがある。そして、これらの問いや課題を解決することは、すなわち教師のねらう力を身につけることにつながっていく。つまり子供の思いや興味関心、問題意識を喚起する教師のはたらきかけによって、学習が子供のものとなるのである。さらに、子供が主体化される言語体験を通して、教師が意図する言語能力を育成することをねらっている。

IV 考察

「教材提示の工夫」と「ゆさぶり発問」の有効性を、実の場である授業において検証したところ、大変有効であることが立証された。

未確認飛行物体 入沢康夫
薬缶だって
 空を飛ばないとはいかぎらない。
 水のいっぱい入った**薬缶**が
 夜ごと、こっそり台所をぬけ出し、
 町の上を、
 心もち身をかしげて、
 一生けんめいに飛んで行く。
 天の河の下、
 渡りの雁の列の下、
 人工衛星の弧の下を、
 息せき切って、飛んで、飛んで、
 (でももちろん、そんなに早かないんだ)
 そのあげく、
 砂漠のまん中に一輪咲いた淋しい花、
 大好きなその白い花に、
 水をみんなやって戻って来る
 ※粹囲みは筆者・寺岡による

その一例である。入沢康夫の「未確認飛行物体」の詩の授業では、「薬缶」を伏字にして教材を提示した。すると、伏字の内容を知りたくて、教材を細部まで読もうという意欲が喚起された。さらに、伏字の内容が「薬缶」であること確認した上で「平仮名で『やかん』と書けばいいのにね」と揺さぶった。すると「砂漠に咲いている淋しい花を助け

ようとしているんだから『薬の入っている缶』と表記した方がいい」という考えをもつことができた。①細部をしっかりと読む②「薬缶」にこめた作者の思いを考えるとという二つのねらいを見事に達成することが出来た。

しかし、この二つだけの手立てで、国語科の全ての単元において二律背反する教育観を一元化できるとは思えない。今後様々な教育機関や団体の学習指導方法を考察し、二律背反する教育観や指導方法を統合し超えるような具体的な学習指導を探ることが、本研究に残された課題である。